やっぱり神は神(笑)で十分だと思う

風廻　疾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
やっぱり神は神（笑）で十分だと思う

【Ｎコード】
Ｎ２４３４Ｎ

【作者名】
風廻　疾

【あらすじ】
なんでゼロの使い魔とかネギま、リリカルとかの世界いけなかったんだろｏｒｔ

ｂｙ主人公
この作品はテンプレどうり神にチートな力をもらい原作ブレイクする話です。
でも主人公、原作に関る気が全くないという（汗
だけど決意します、そんな主人公ががんばる話です！

行きたいところに行かせてください（前書き）

とりあえず言っておく！始まりなんでこんなので許してくださいｏｒｔ

行きたいところに行かせてください

ｓｉｄｅ　？

「チェックメイト」

それが俺が最後にこの世界で言った言葉だった。

ｓｉｄｅ　？

気がついたら一面真っ白な世界にいた。

どちらが上か下なのかすら、分からず。

自分が本当にここに立っていると言うことにも自身がもてないそんな空間だ。

きっとここに長くいたら俺はイカレテしまうんじゃないかと思った。

そして、そんなことを冷静に考えてる俺が怖かった。

そして声が聞こえた

「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗ（爆）」

・・・・声は聞こえなかった

「ちょｗｗ無視はなしでしょｗｗ」

うざいけど、しょうがないから話しかけてあげた

「あなた、誰ですか？」

「俺？俺は神様さ！」

・・・俺はもうイカレ始めてる気がする。
「嫌、大丈夫だからｗｗ俺本物よｗｗ」
なんか思考読まれた、うざい。
「分かった、認めてやろう神（笑）と」

「神（笑）はないだろ汗、すこし酷いぞ」
こいつめんどくさいな・・・
まあいいか、とりあえず色々聞いてみるか

「なあ神（偽）なんで俺ここにいるの？」

「神じゃ無くなったな、俺！」
めんどくさいな、早く質問に答えろよな
「めんどくさいな、早く質問に答えろよな」

「うわぁ、言ってることと、考えてる事がいっちしやがった。分かったよ教えてやるよ」

「いいか、つまり俺様が神になってから・・・・でようやくこの世界作ってな・・・・まだ世界増えててな・・・・つまり「長い！３０文字でまとめろ！」
「暇だったから、適当なやつ選んで転生でもさせようと思いました！」

あまりに長いもんで切れてしまった・・・
それにしても本当に３０文字で言いやがった中々やるな・・・
それにしても転生ねぇ・・・・やったあああああああああああ！
「マジで転生させてくれるの！」

「マジだ」

やったぞ！長年の夢が叶ったぞ！
これは俺がもし転生するならとか考えて書いた小説とかのお陰だなきっと！

「ならネギまの世界に生かせてくれ！」
ふふふ、茶々丸は俺の嫁だ！

「悪い、ほかの奴そこに送ったから無理」
な、なんだとおおおおくそ、なら

「じゃあゼロ魔の世界に行かせてくれ！」

「悪い、それもむり」
・・・な、ならリリカルでいいや、リリカルなら大丈夫なはずだ

「ならリリカルな「悪いそれもだめだ」・・・」

「どうした？」

「ふざけるなーーーー！なら、なんの世界なら良いんだよ！」

「コードギアス」

・・・・いや悪いけどそれはない、だってあれにでてくる女性キャラなんか全員怖いし「リーナとか、ナナリーも目を開けたら怖かったし」いっぱい人死ぬし

「・・・ほかの世界にチェンジで、お願いします神様」

「だめです！」
ものすごいいい笑顔
「まあ安心しろ能力とかはいっぱいやるし、原作ブレイクなんて全然構わないし」
いやでも嫌なんだし

「じゃあいってら」
神は手を振っている＋俺の足元には黒い穴みたいなのが急に現れた
＝「ふざけんなこらあああぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」
そして俺は望まない世界えの転生を果たすことになった・・・・

ｓｉｄｅ　神（笑）
酷くないか！まあいい何をいっても無駄なんだろ俺様は分かってるさ！（グスン

それにしてもあいつ、自分の精神がどんどん変化していってるのに気づいたかな？
そもそも人がこんな空間にいて会話できる時点で奇跡みたいなものなのに。

まさか自分自身をこの空間に馴染ませるなんて、普通出来ないぞ
本当に楽しめそうな奴だな、くーくっくく

さあ始めようか、異世界と異世界が交じり合う摩訶不思議な物語を！

行きたいところに行かせてください（後書き）

ここまで読んでくれてありがとう！

ぶっちゃけると、最後のあたりの神（笑）の言ってることはすべて関係ありませんｗｗｗ

神（笑）も今後でるかどうかｗ

まあこんなぐだぐだな、作者ですがよろしくです！

ふつう赤ちゃんから始まるだろｏｒｔ（前書き）

体がだるい・・・ｏｒｔ

ふつう赤ちゃんから始まるだろｏｒｔ

ｓｉｄｅ　？

どうしよう・・・

しょっぱなからピンチだよ・・・

なんで、なんで母親の体の中にいる状態からスタートなんだよ！

普通生まれた時に意識が目覚めて赤ちゃんからかよーって言うところじゃないのかよ！

くそ、あせってもしょうがない！

とりあえず生まれるまでどうしよう・・・

二ヵ月後

暇だ暇だ暇だ・・・

四ヵ月後

・・・・・・

六ヶ月後

暴れ始める

出産日

うぉ、なんだこれ体がものすごく押し出されるんだが！

まさか・・・まさか！ようやく出産なのか！

やったあああああああ！

ｓｉｄｅ　？

おぎゃおぎゃおぎゃ・・・・
この泣き声はまさか！
ドアを思いっきり開けた！

私に知らせようと思ったのか、ドアのところにいた人がものすごく
ビックリしてたけどそんなことより！

そして見てみると妻のノレーヌが子供を抱いていた！
「ノレーヌそれが私の息子か！」
私は妻に駆け寄った

「あなた私たちの、でしょう」

「そうだな、そうにきまってる」
私としたことが焦っていたようだな・・・

「抱いてみます？」
妻に言われた
答えはもちろん
「当たり前だ！」
そしてそっと、抱いた
思わず顔が綻んでしまう

「よし決めたぞこの子の名前はシャル。シャル・ウィリアムだ」

ｓｉｄｅシャル
ようやく出産されたぞおおおお！
とりあえず父親と母親の顔でも確認しないとな。
母親は・・・うんものすごく良い。普通に美人だ、これ
父親は・・・・・・・もうすこし冷静になってください

なんか名前も決められてるし。
でもシャル、シャルか・・・良い名前だな！

その点では父親をほめてやろう。だがしかし！
抱きしめる力が強すぎるんだが・・・・・
これ俺がチートしようじゃなかったらどうなるんだろう・・・

まあいいかこれでようやく、あの暇な空間から脱出できるぜえええ！
でも赤ちゃんライフか・・・・・

１５、６年がたった

そこ進みすぎとか言わない！
なんにも書くことがないんだよ！

しいて言うなら目立ちないからずっと普通の人をよそをってたくらいかな。
だって天才とか言われたくないし、軍とかに入れさせられそうなんだもん！

まあとりあえずアッシュフォード学院に入学したとだけ言っておこう

ふつう赤ちゃんから始まるだろｏｒｔ（後書き）

読んでくれてありがとう！
原作の知識を作者がうる覚えなので時空列とかがくるいそうです・・・
・
というより絶対に間違いがでますね、これ
・・・・もう一回みるか

そんな話聞いてない！（前書き）

今回短いです・・・・

そんな話聞いてない！

ｓｉｄｅ　シャル

アッシュフォード学院前に今俺はいる

「ここには来るつもりは無かったのにな・・・・・」

俺は原作に関わるつもりは無かったのに・・・

くそ、これも親父が悪いんだ！

二週間前・・・

「シャルこっちに来なさい」

親父が俺を呼んだ

「何の用？親父」

「いやなに、お前を今の学校から転校させようかとおもってな」

・・・・はい？

「えと、どういう意味？」

いきなり転校させるってどういうつもりなんだ、親父は？

「ふむ、私の知り合いにルーベン・アッシュフォードと言う奴がおってな、この前お前のことを話したら是非うちの学園に来ないかと誘われてな」

「で、でもいきなり転校だなんて」

「まあそう言うな、ルーベンとは長い付き合いでな断るのもな。お前なら分かるだろ」

いや、確かに分かる、分かるけれども。

「拒否権はあるのか？」

「もちろん無い」

ｏｒｔ

「向こうに行くのは二週間後だから早く用意しとけよ」

早いだろ！

「ちょ、まって」

「まちません」

ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ

なんて感傷に浸っていると声をかけられた

「ねえ、そこにいる貴方はシャル・ウィリアムでよかったかしら？」

声をかけてきたのはミレイ・アッシュフォードだった、もろ原作メンバーですね。

「そうですが何か？」

まあ一応初対面だからな

「御爺さんから、貴方の案内を頼まれてね」
案内か確かに必要だな

「じゃあ、お願いします」
そう言ったとたんミレイの目が光り

「学園探検ツアーに一名様ごあんなーい！」
などと言った。そうだったこんな性格だったなこの人は・・・

「どうした、テンション低いぞ少年」
これが普通です・・・

「これが普通ですアッシュフォードさん」

「ミレイでいいわよシャル君」
分かってますでもいきなり言ったら失礼でしょ

「とりあえず、クラブハウスのほうに行きましょうか。貴方が今後生活する場所でもあるんだし」

・・・・まってくれ初耳なんだが
「どういうことですか？」

「あれ貴方の父親から聞いてない？あなたはこの学院の生徒会にはいりクラブハウスで暮らしてもらうのよ？」

「なんでですか！」
なんでそんなさらに原作に近づく

「なんでも、どんな事もそつなくこなすけど、能力は高いわけでは無いから生徒会にでもいれて鍛えるとかなんとか」

今までの行動裏めったあああああああ
いやまてつまり出来るようになれば帰れるのか？

「つまり、成長さえすれば帰っていいと」

「どうなんでしょうね？まあ望みはあると思うわよ？」
それに掛けるしかないな・・・・

「分かった、やらせてもらうよ・・・」

「あと別に素で話してもらって良いわよ？」

「わかった」

「じゃあクラブハウスのほうに行きましょうか。生徒会のメンバーにも紹介したいし」

「分かった」

そんな話聞いてない！（後書き）

ミレイさんてこんな話かたでしたっけ？

キャラの口調で困りそうだな・・・・汗

さて始めての原作キャラでしたがどうでしょう？

一応意識して書きましたが。

間違ってるところを教えてくれると作者は嬉しいです（特にコードギアスの設定）

まあ一番の問題はいまだに宿題が全然終わってないことだな汗

明日はちょっと出かけるので更新はきついと思います。

やっと原作キャラ達に会い始めた・・・（前書き）

眠い・・・

やっと原作キャラ達に会い始めた・・・

ｓｉｄｅ　シャル

とりあえずクラブハウス前に着いた

ミレイさんからは呼んだら入ってきてね～♪

と言われてなんか転校してクラスに入る時みたいだと思ったが、そこまで違ってはいないから突っ込めなかった・・・

それにしても生徒会に入ることになるなんて・・・

確かここは業務が大量にあって大変なんだよな

いやまあ、神（笑）に貰った力あるしそこまで苦じゃないよ

むしろ楽勝だよ？だけどなんか精神的にね

まあとっとと、チートパワーを使って俺は成長しました的なことにして帰るか

思うんだが今まで一回もチートキャラらしい事してないし、ここまで原作に関わる気が無い主人公はどうなんだ「作者」

黙れそういう事して欲しいなら他の作品いかせろ！

ｓｉｄｅ　ルルーシュ

「今日からこの生徒会に新しいメンバーが加わります！」

ミレイさんがまた何かを言い始めたな

この言葉から推測できることは約１０パターン程あるがどういうことなんだ？

「えっと、ミレイちゃんどういうこと？」
ニーナがミレイに質問した

「御爺さんからね頼まれちゃったのよいれてやってくれって。なんでも知り合いからの頼みで断り辛かったらしいわ」
ちょっとまて親父相手から言ってきた言ったよな、あれ嘘かよ！「シャル」

なんだ今、幻聴が聞こえた気がするが・・・
まあいい、それよりも今は・・・

「それで、その新しいメンバーとやらはどこにいるんです？」

「そこの扉の向こうにいます」
と言ってミレイさんは入り口のドアを指差した

「なら今から顔合わせということですね？」

「もちろん嫌なら、嫌と言ってくれて構わないわ。どんな手を使ってでも断るから」

「そんなのあって見ないと分からないよ。ねえルル♪」

まあ確かにシャーリーの言うとうり、会ってみなけれどんな奴か分からないからな
会ってみてから対策を考えるしかないな。
ナナリーは俺が守る！

「そうですね、とりあえず会って見ましょうか」

「そうだぜ、みんな。もしかしたらものすごい美人な人かも知れないしな」
リヴァルが言った

「キャー、リヴァル、エッチー」

「リヴァル君・・・・」

「ちょっとまって、ニーナその反応は無いでしょう」
リヴァルが慌てていった

「そうね、とりあえず会ってもらうわね。
シャル君入って～」

ｓｉｄｅシャル

「シャル君入って～」
ミレイさんに呼ばれた

「ガチャ」
ドアノブを回して中に入っていた
中にはスザク、カレン、ナナリーを除いた生徒会メンバーがいた
「とりあえず自己紹介ね」
先に自己紹介をしておくことにした
「俺はシャル・ウィリアムだよろしく」
その後次々に自己紹介をしていった
「私はシャーリーよろしくね」
「俺はリヴァルよろしく」
「に、ニーナです・・」
「ルルーシュだ」
これで一通り自己紹介も終わりかな
などと考えていたら
「さっそくで悪いんだけど、今仕事溜まってるから手伝って！」
ミレイさんがなどと言い放ちやがった
これは他の奴らも驚いていて
「げ、嘘だろう」
「ミレイちゃん、どういう事？」

「また何かイベントでもやるつもりですか？（これでこいつがどれくらいできるか分かるな）」

「そんな～」

「なに転校生が来たことだし、大追いかけっこ大会みたいのでもやろうかとね」
やっぱりそれとこれとじゃ繋がりがまったく無い気がする・・・
これがミレイさんの思いつきか、確かにめんどくさそうだな。

「じゃあシャル君はこの書類お願いね」
などと考えてるあいだにいつの間にかみんな始めてた・・・慣れすぎだろ

「分かりました」
ものすごく、早く終わらせて驚かせてやる

やっと原作キャラ達に会い始めた・・・（後書き）

宿題の暇つぶしにすこしやるつもりが一話完成しちまった。

てかヒロインどうしよう・・・・・・

こんなことってないよ・・・・（前書き）

体が重い・・・ｏｒｔ

こんなことってないよ・・・・

ｓｉｄｅシャル

ミレイさんから渡された書類は計算作業がメインのようだ
まあ始めての人にやらせるとしたらこんなものかな、と思いながら作業を始めた。

ときどきミレイさんに質問をして、作業を続けた。
そして渡された書類すべてを片付けたのでミレイさんに見せた

「ミレイさん終わった」

「え！もう終わったの」
ミレイさんは驚いていた、まあ能力が高くないと言われて送り込まれたのにこんなに早く終わらせたらそりゃ驚くだろうが。
だがこんなの俺にとってはものすごく簡単な作業だ、やろうと思えばパラパラと全部の書類を見ただけですべての計算などを終わらせることも出来るしな。

「イエス」
とりあえずミレイさんにはイエスと返しておいた

「ちょ、ちょっと見せて」
ミレイさんはそう言ってさっきまで俺がやっていた書類をひったくると、書類を見始めた。
そして見終わったのか顔を上げると

「ざっと見たところミスとかなさそうね・・・」

と言った。その瞬間他のみんなメンバーも

「マジかよ」

「すごーい、ルルと同じかそれ以上の速さじゃない？」

「ふむ、なかなか出来るようだな」

「シャルさん・・・すごいです」

などと言った

俺はいまのと同じ速さぐらいなのかルルーシュはと思いながらも

「大丈夫ミスなんて無いですよ、それで次はどうするんです？」

などと有能さをアピールした、とりあえず早く帰りたいからな。

「えっと、そうねちょうど良いから休憩にしましょうか」

休憩なんて無くても何十時間でも働けるがな、と内心思いつつ俺はうなずいた

「シャル君すごいね、あんなに早く終わらせるのルル以外見たこと無いよ」

ルルーシュより早くできるがな

「そうでもないさ」

「いや、十分すげーよ」

「確かに、これなら仕事がかなり楽になるな」

ルルーシュ、お前はもうすぐ黒の騎士団作って仕事サボるだろうが・・・

「それにしてもシャルこれはどーゆう事なのかな」

「何がです？」
まあ俺の能力の高さについてだろうが、能力はたかく無いって聞いてるのにこれはなあ。

「貴方、能力はそれほど高く無いって聞いてたけど」

「ああ、それは軍にむりやり入れさせられるのが嫌だから偽ってたんですよ」
まあウソは言ってないな
「なんですとー」
ミレイさんその驚き方は無い、断じてない

「どういうこと？」

「うん？俺の親父、軍の人なんだよ。結構昔から、これでもう少し優秀ならな。とか言って俺を軍に入れたがるんだよ」
まあ俺としたらまだ無理やりじゃないから助かるんだけどな

「うわ、大変だなそれ」

「ふむ、それで力を発揮できるようにこっちに来たのか？」
ルルーシュそれは違うぞ、断じて違う。
俺はこんなところ来たく無かった

「いや、違うこれは親父の独断」

「どういうことなの？」
リーナ・・・それは俺のセリフだよ
「たぶん、俺よりミレイさんの方が状況を把握してるよ」
めんどくさいから丸投げです
「そうね、まあ簡単に説明すると・・・・」
ミレイさんみんなに説明中
最後に俺にも向けて説明する
「それで成長したら軍にいれるらしいわ」
・・・・え？
「ど、どういうことです？」
意味がわからなーい
「そのままの意味よ」
考えろ、軍に入るのと生徒会に居つづけるのどちらがいいか・・・
そのときリヴァルが目に入る
「すみません、お願いなんですが。俺は向こうにいたときとなんの変化も無いと報告してくれますか」
リヴァルポジションなら大丈夫だ、なんとかなる
「そうね、みんなは大丈夫？」
ミレイさんはみんなにきいた
「私は大丈夫」

シャーリーありがとう

「もちろん俺もオッケーだぜ」
リヴァル助かる

「まあこいつが入れば仕事が楽になるしな」
だからお前は結局サボることになるだろうが

「わ、私も大丈夫だよミレイちゃん」
よし！一番の難問もクリアー

「なら大丈夫ね、私達生徒会はシャル・ウィリアムを歓迎します」

「ありがとうございます」
だけどこれでもう逃げれないな・・・・

こんなことってないよ・・・・（後書き）

一度にでてくるキャラクターが多すぎる・・・・

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　上（前書き）

バイト疲れた・・・

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　上

ｓｉｄｅシャル

とりあえずあの後、書類を終わらせルルーシュにクラブハウスを案内して貰っている
ルルーシュに案内をたのんだミレイさんは、これでイベントの数を増やせるかしらなどと言ってた。
それを聞いて回りが顔を青くしたのが今でも思い出せる。
俺も若干顔を青くしたと思う。
チートだって嫌なことは嫌なのだ

「これで大体回ったな」

「うん？そうか」
いつの間にやら終わったらしい

「ああ、後はお前の部屋と俺の部屋だけだ」

「ルルーシュもここに住んでるのか？」
まあ知っていますがねぇ

「ああ、妹とメイドの咲世子さんの三人でな」

「へー、ルルーシュには妹がいたのか」
これまた知ってますがね

「ああ、言っておくが妹に手を出したら許さんからな」
ルルーシュが威圧感をだして言ってくる。

だが俺にはあまり意味が無い。てか神（笑）どんだけ能力付けたんだ？

身体能力、思考能力などは当たり前でその他の色々なのが強化されてるし。
なぜだかギアスまで使えるからな。

「はい、はい」
ルルーシュには軽く返事をしておいた

「お前本当に分かってるのか？」
ルルーシュすこし怒ってます

「いや、大丈夫だって。今のはすこしルルーシュの反応が見たかっただけだし」

「おい、それはどういう事だ」

「そのままの意味だけど、それでルルーシュはどこに居座ってるんだ？」

「納得出来ないのだがまあ良い。部屋はすぐそこだ着いて来い」
あれ案内してくれるの？

「案内してくれるのか？お前は妹に合わせないとか言って教えてくれないと思ったのに」

「ふん、会わせたくないが、お前もここに住むんだ追々会うことになるだろ、それなら俺がいる今のうちに会わせとこうと思ってな」
一応考えた上での判断なのね

「了解、じゃあ行こうか」

「ああ」

テクテク部屋に前に着くまで二人は終始無言なのであった・・・
まあ三十秒ぐらいだが

「ここだ、言っておくが妹のナナリーになにかしたら・・・判ってるな？」
ルルーシュは俺に一言そう言ってドアを開けた

「あ、お兄様お帰りなさい。今日はすこし遅かったんですね」

「お帰りなさいませルルーシュ様」
開けてすぐに二人の声が聞こえた

「ああただいまナナリーそれに咲世子さんも」

ルルーシュは中に入っていくので俺もそれに着いていった

「それでお兄様、一緒にいる方はだれなんですか？」
お、俺に気づいたな

「ああ、今日生徒会に入ったシャルだ、こいつもクラブハウスに住むことになってるから、一応顔見せでもと思ってな」

「シャルさんですか、確かこの学校にはそんな名前の人は居なかったはずですが・・・」
ちょっとまってくれ咲世子さんあなたはこの学校の生徒全員を把握

しているのか！

「ああ、転校生なんですよ俺」

「そうでしたか、私は篠崎咲世子と申します」

「私はナナリー・ランペルージです」
これは俺も自己紹介しないとな

「シャル・ウィリアムだよろしくな」

「まあとりあえずこっちにでも座ってくれ」
ルルーシュに進められテーブルに向かってイスに座ると机の上には
折り紙があった

「折り紙か」

「シャルさん、折り紙知ってるんですか？」
やばいつい声に出てしまったブリタニア人なのに折り紙知ってたら
おかしいだろ俺！

「あ、ああまあな」

「そうなんですか、すごいですねお兄様でも知らなかったのに」
やめてナナリーそのお兄様がにらんで来るよ、あはははは
まあいいや、折り紙なんて知ってる人知ってるはずだろ

「それで、何を折ってたんだ？」
ナナリーに聞いてみた

「鶴です目が見えないから折りづらくて・・・」
そういえばまだナナリーは目が見えないんだったな

「そうか、そればっかりは何度もやらないと大変だもんな」

「そ、そうですね」
なぜだ急にナナリーが嬉しそうな顔をしたぞ？
シスコン説明プリーズとばかりにルルーシュを見るがなぜか驚いた顔をしていた。
くそなんだこれは

「ま、まあ頑張れば難しいのも折れるようになるはずさ」

確かゲームのほうではライがいたがサクラなんかを折れるようになってたはずだ
「本当ですか？」

「ああ、俺は冗談は言うがウソは・・・それなりに言わないぞ」

「それじゃあ信用ないですよ」
と言ってナナリーは笑った

「いや、本当に出来るようになるって」

「じゃあ何か折ってください。それで信用します」
さらに笑顔になった何だ何が起こってる！

「あ、ああ判った」
とりあえずサクラを折ることにした
カサ、カサ・・・

出来たー我ながら良い出来だな
とりあえずナナリーに渡す事にした
「ほら」
「わー、すごい。シャルさん折り紙上手いんですね」
「まあ多少はな」
「よかったら教えてくれますか？咲世子さんそれほど折り紙が上手では無いそうなので」
俺は咲世子さんを見た
咲世子さんは黙って首を立てにふった
く、しょうがない
「分かった暇な時で良いなら教えてやるよ」
「なら今から早速教えてもらえますか？」
「その前に夕飯を食べてしまいましょう皆さんお腹が減ってる『ぐー』でしょう」
そう咲世子さんが言った瞬間ナナリーのお腹がなった
「きゃ、恥ずかしい・・・」
てれてものすごく赤くなってしまったナナリー
「シャルさんもどうです一緒に」
咲世子さん進めてきた
まあどうせ部屋にいっても飯なんてないしな

戴いていこう

「じゃあお言葉に甘えて、ルルーシュとナナリーいいよな？」
先ほどから空気とかしてたルルーシュと真っ赤なナナリーに聞いた

「あ、ああ」

「はい」
ルルーシュお前どうした？

「それでは用意いたしますので少々お待ちください」
そう言って咲世子さんは厨房にいった

これから一体どうなるんだ？

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　上（後書き）

書いてるうちにこれは長くなりそうだなと思ったので上下で分けます

なんかどんどん文字の量が増えてきた気がする・・・

それになぜだろうここはただ挨拶して終わりだったはずなのに、なんか主人公はフラグ立ててくれるし。

まあナナリーは結構書きやすいからいいんだが・・・

それから一応言っておくとギアスは主人公が唯一使える摩訶不思議パワーです。

ですので一応物語には関わってきますまあどの程度かは言いませんが後オリキャラとか他に出したほうが良いですかね？まだ何も考えてませんが

それともうひとつライって出したほうがいいですかね？

俺はライは好きなんで出したいんですけど、そうするとカレンはライのヒロインになると思います「まあまだどうなるか決めてないけど」

後最後に、ＰＶ１００００　ユニーク２０００越えました！

こんなに多くの人に読んでもらえるとは思いもよりませんでした！

出来うることならば皆さんビシビシ感想、批評あわよくば評価やお気に入りに入れてくれると作者は嬉しくて踊ります。

それではまた朝の９時ごろにあげたいと思います

Good night. nice dreams.

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　下（前書き）

寝すぎた・・・ｏｒｔ

もう時間とか言うべきじゃないね

守れる気がしないし・・・

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　下

前作のながれ、なんで主人公ナナリーにフラグ立てるんだ・・・
俺だって好きに立てたんじゃねぇ！ｂｙシャル

「お食事の準備が出来ました」
咲世子さんの料理かおいしいだろうし期待してみようかな

「咲世子さんの料理はおいしいんですよ」

「ありがとうございます」
テキパキと用意をしながらも御礼を言う咲世子さん
なんかさすがはメイドだなと思う

「それじゃあ食べるとするか」
お！ルルーシュ復活したのか

「そうですね」
それじゃあさっそく・・・

「あ、お兄様、シャルさんこの前、咲世子さんに日本ではご飯を食べる前にいただきますと言うらしいですよ。良かったらやってみませんか？」

「俺は別にいいぞ、ルルーシュは？」

「俺がナナリーの頼みを断るとでも思ったのか？もちらん俺も良いに決まってるだろう」

まあシスコンのお前ならそうだよなルルーシュ

「えっと、それじゃあいただきます」

ナナリーはすこしためらいながらも言った

「「いただきます」」

とりあえず料理を見てみると所々日本食が混じっている

これは本気で嬉しい転生していらい日本食を口にすることなんて無かったからな

これは日本食から食うしかないだろ

ヒョイ、パク、もしゃもしゃ・・・

「おいしい！」

「あ、それは日本食なんですよ。咲世子が作ってくれるんです」

咲世子さんやっぱり貴方は天才だ・・・

「咲世子さんおいしいです」

「ありがとうございます」

「咲世子さんの作る料理はなんでもおいしいからな。どんどん食べるといい」

「それじゃあお言葉にあまえて」
ヒョイ、パク　ヒョイ、パク　ヒョイ、パク・・・・・・・
「あーおいしかった」
いっぱい食ったな・・・ゲプ
「も、ものすごい食べたな」
「あーまあ美味しかったしな咲世子さん料理すごいうまいんですね」
「ありがとうございます」
「それにしたって、食べすぎですよシャルさん」
「まあ少しは自覚してる」
久しぶりの日本食だからって無理しすぎた・・・ｏｒｔ
「そういえば、食べ終わった後にも日本では何か言うんでしたね。
えーと、ごっちゃんです？」
ごっちゃんですって・・・
「ナナリーさま、ごちそうさまです」
「ああ、そうでした。それじゃあごちそうさまでした」
「「ごちそうさまでした」」
「お粗末さまでした」
「それじゃあシャルさん折り紙教えてくれますか？」
ついにきたか・・・

「ああ」

「シャルもうこんな時間だし部屋に戻ったほうが良くないか？」
ルルーシュ、ナイス！
チラッと時計を見て

「うわ、もうこんな時間か。頼むルルーシュ部屋まで案内してくれ」

「ああ」

「え、もういってしまうんですか？」
ナナリー・・・なぜそんな悲しそうな顔をする俺達は今日初対面だろ

「大丈夫またこんどな」

「はい」
今度は嬉しそうな顔するし、意味が分からん

「いくぞ」

「分かったルルーシュ」

「さようなら、またきて下さいね」

「ああ」

ルルーシュのほうに向かった
俺の部屋はナナリーとルルーシュの部屋から３０メートルぐらいのところに会った。

「それじゃあおやすみ」
もう今日は疲れたさっさと寝よう・・・

「シャル・・・ありがとうナナリーのあんな楽しそうな笑顔久しぶりに見た。これもお前がナナリーの足や目のことを気にせず接してくれたおかげだ。みんなナナリーに会うと最初はどうしても気にしてしまうからな」
嫌ただ興味ないだけなんだが・・・

「だから本当にありがとう。これからもナナリーとたまにでいいから話相手にでもなってくれ」

「ああ、分かった」

「だが、もし手を出したら許さないからな」
さすがルルーシュだな

「大丈夫そんな心配するな」

「なんだとナナリーには魅力が無いとでも言うのか！」
違うだろこのロリコン

「違うそういう意味じゃない！」

「じゃあどういう意味なんだ！きっちり説明してもらうからな！」
なんでこういうことになるんだ・・・・・・

あのあと何とかルルーシュを撃退した俺はベットをみるたび飛び込んだ。

今日は本当に疲れた・・・・・・・

なぜ主人公はフラグを立てるのだろうかｂｙ作者　下（後書き）

あれなぜだろうこの話は１０００文字くらいはずが２０００を越えたぞ？

まあそれはほっといて「いいのか作者」

皆様ここまで読んでいただいてありがとうございます！

批評、感想あわよくば評価やお気に入りを作者はまっていますどしどし送ってください！

ナナリーが書きやすすぎてびっくりしてる

初めてのクラス（前書き）

すごく・・・眠いです

初めてのクラス

ｓｉｄｅシャル
「私が呼んだら入ってきてね」
さてみなさんこの言葉だけで今どのような状況かわかるだろう？

正解は転校生をクラスに紹介する一歩前です
「分かりました」
俺は先生に返事をしてうなずいた

ガラガラガラ・・・
先生はクラスに入っていった

転校なんて生まれて初めてだな、しかし緊張とかしないな・・・
まあ良い言うことなどただひとつなんだ

「シャル君入って」
やっとか・・・

ガラガラ
スタスタ・・・
教壇のところまですたすたと歩いて行く

「シャル・ウィリアムだ。自己紹介の前みんなにはひとつだけ言いたいことがある」
これだけは言っておかないといけないな、変に関わられると嫌だし

「俺のことを知りたいのなら自分のことを知られる覚悟をもて。俺に関わるなら関われる覚悟を持て。

俺を助けようとするなら助けられる覚悟を持て。そして自分のすることに覚悟が無いのなら俺には関わらないでくれ。覚悟がなければきっとそれは、意味が無いことだから」

覚悟も無い奴に関わられたくないしな、まあ本当に自分のやること全てに覚悟を持てるのならそいつはきっと俺を超えるチートやろうだけどな。

シーンとなっちまったな、てか先生、貴方も黙ってちゃだめでしょ・・・

しょうがない

「先生俺の席どこですか？」

「あ、ああそこの窓際の席だ」

「わかりました」

とりあえず座るか

「えと、それでは質問タイムだ聞きたいことがあるなら手を上げてくれ」

それはどうなんだ先生この感じでいくと誰も手を上げないぞ

シーン・・・・・

ほら見てみろ誰も手を上げないじゃないか

しょうがないな

「あーさっきはああ言ったがとりあえず今は質問を受け付けるぞ」

これで誰も質問とかしなかったら絶望てきだな

「え、えーとそれじゃあ前までどこにいたの？」
お！質問きた
「〇〇だ」
「部活とかなにやってたんだ？」
一応落ち着いたのか手を上げる奴が増えてきたな
とりあえずこれから質問終わるまでは同じことの繰り返しなので飛ばすから

昼放課
「おいシャルどういうつもりだ！」
お、ルルーシュじゃないどうしたの
「何が？」
「お前の自己紹介だあんな態度じゃ友達できないぞ！」
「別にいいぞ？」
変な友達なんて欲しくもないし
「お前本気で言ってるのか！」
「ああ、確かに友達は欲しいがいっぱい欲しいって分けじゃないし。
俺が欲しいのは本当の友達だけだ。
今のところ認めているのは生徒会メンバーとナナリー、咲世子さんくらいだな。」
一応アニメだったらみんな覚悟決めたりしてるもんな・・・

「そんなこと言ったって「ストープ！」なんだ！」
うだうだめんどくさいんだよ・・・

「この話はもうおしまいな！分かったな！」
キンコーンカーンコーン
「ちょうど鐘もなったしなじゃーな！」

俺は自分の教室に帰っていった

「あ、ちょっとまてシャル！」
後ろでルルーシュが何か言ってるがまあ無視だ

とりあえず授業がんばろう

初めてのクラス（後書き）

見てくださったみなさま今回の作品は主人公がなぜかすこし痛いキャラなってますがご了承くださいｏｒｔ

で、でもね覚悟は大切だと思うんですよ俺！
覚悟ではなくて責任でも良いんですけど自分の言葉に責任や覚悟を持つ人っていませんよね「自分もですけど」

やっぱりそういうのは大切なんですよ本当に・・・

は、はいこの話はもうほっといてＰＶ２５０００、ユニーク３５００突破！
本当にありがとうございます！

後、感想や批評こうして欲しいなどどんどん送ってください「作者の技量で出来たらですけど」
それではみなさん
Ｇｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ．　Ｎｉｃｅ　ｄｒｅａｍ

捕まるわけにはいけないんだ！（前書き）

宿題が終わらない・・・

捕まるわけにはいけないんだ！

ｓｉｄｅ　シャル

「まてー！」

「まちなさい！」

「おとなしく捕まれー！」

「シャル！」

どうしてこんな目に会ってるんだ・・・・

それは今から一時間ほど前のことだ・・・

「いまから大鬼ごっこ大会を始めます！」

ミレイさんの声が放送で流れてきた、と言うか何なんだ大鬼ごっこ大会って・・・

「まためんどくさい事になりそうだ・・・」

ルルーシュその気持ちは分かるよ

「いったい大鬼ごっこ大会ってなんだよ」

「それを考えても意味は無い、俺達が今考えることはどうこの場面を切り抜けるか、と言うことだ」

まあそうだよな・・・

「ルールは簡単です！まず逃げる人と捕まえる人に別れてもらいます！これはどちらになってもＯＫ好きなほうになってください、ただし生徒会メンバーの男子は逃げる人に決定です。捕まえる人はこちらで配るバンダナを付けてもらえます」

逃げる人役ねぇ、俺はともかくルルーシュはきついだろうな・・・

「さらに追加ルールとしてルルーシュもしくはシャルを捕まえた人には金一封をプレゼントです！」

なに言ってくれてるのミレイさん！

「そして生徒会メンバーはもし捕まったら罰ゲームがまってるので必死で逃げてね♪」

「な、何を考えてるんだあの人は！」

まあルルーシュはキツイしな。ミレイさんの言葉のせいで殆どの生徒が俺達を狙うしな・・・・

まあ俺ならなんとか逃げ切れるだろう

「まあ頑張れルルーシュ」

「あ、ああ。そ、そうだここは二人で協力体制をひいてだな・・・」

悪いルルーシュ、お前と組むより一人のほうが安全なんだ

「悪いが俺は一人でにげる、一人で頑張って逃げてくれ・・・」

「な、シャル！裏切るのか」

すみません・・・

「それでは開始です」

非常にも開始の合図がなった

「じゃあな、頑張って逃げろよ！」
そう言って俺は走ってそこから逃げていった

それからすこし時間が経って冒頭の状況になりまして

すみません正直なめてました。
だけど後五分逃げれば助かるんだ！

「まてと言われて待つ奴がいるかー」
死ぬ気でにげてやる！

「おとなしく捕まれー俺の金！」

「ちょっとあれは私のよ！」

「ふざけるな！」

よし仲間割れしてるな
このうちに逃げる
て！なんで前から来るの！

「やはりこっちに来たか！大人しくお縄につけシャル！」
つくわけないだろとりあえず後ろに・・・
って後ろも人いるじゃん！や、やばい逃げ道が・・・
「みんないっせいに掛かれ！」
ちょ、やめろー！
そしてもう捕まると思った瞬間

「時間になりましたので大鬼ごっこ大会を終了させてもらいます」
すこし残念そうな声でミレイさんが言った・・・
つまり・・・
「俺は生き残ったぞーーー！」

それから少し経って生徒会室
ルルーシュに罰ゲームが執行されている
だけど似合いすぎだろ・・・・
「さすがはルルーシュね・・・」
「・・・きれい」
「うん・・・」
女性人は言葉も無いと言う状態だ
「これでもう良いですかミレイさん着替えても」
ルルーシュお前の気持ちは分かるが少しは我慢しろ・・・
「しっかしルルーシュの女装似合いすぎでしょ」
リヴァル・・・同意権だ
「そうね」

「似合いすぎてて」

「嫉妬しちゃう」
そこの三人、三人でひとつの文を作るな！

「そんなこと言われてもうれしく無いですよ」

「それにしても、捕まったらこれか・・・」
逃げ切ってよかった・・・

「そうね、女装をさせて見ようと思ったけどシャル君逃げ切っちゃうんだもん」
残念そうに言わないでください・・・

「そりゃあ逃げますよ、全力で」
ほんと逃げ切ってよかった・・・
あと数秒でも終わるのが遅かったら・・・ゾク

「まあもう切りもいいし解散かしら」

「そうだね、ミレイちゃん」

「ふー、やっとですかじゃあ着替えてきます」
お疲れ様ルルーシュ

「あ、ルルーシュは今日一日はその格好よ」
あ、ルルーシュが固まった

「後で咲世子さんに聞くからずるしちゃダメよもししたら・・・・
今度は何をしようかしらねぇ」

なんかものすごく悪い人見たいですねミレイさん

「じゃあ、ルルーシュお先にな」

俺は直ぐにこの場を離れて自分の部屋に行った

どうでもいい事だがミレイさんはこの事をもとに、後に男女逆転祭りなるもの開いたとか開かなかったとか。

捕まるわけにはいけないんだ！（後書き）

宿題がまだ半分以上残ってることに恐怖心を抱くこのごろ

十話投稿してまだ本編に行かないと言うこの恐怖

いったい何話書くことになるんでしょうね？

ここまで読んでくださってありがとうございます！

作者は批評、感想、評価、お気に入りを待ってます

それでは、また！

バイト行くか・・・・

さ、さすがは主人公・・・ｂｙ作者（前書き）

ペルソナ3面白いよ、面白くて小説書くこと忘れてたぜ・・・

さ、さすがは主人公・・・ｂｙ作者

ｓｉｄｅ　シャル
昼放課、俺は飯をさっさと食べて寝ようと思いあまり人に来ないところに向かった
そしたらその途中に人が集まっていた
とりあえず騒がしく、うるさかった

「なんでこんな騒がしいんだ？」
俺は近くの奴に聞いてみた

「ああ、カレンさんが学校に来たんだよ、だから親衛隊のやつらとかがな」
なんで学校に来ただけで・・・ああ、そういえば学校では体が弱い演技しているんだったな

「教えてくれてサンキュー」
それだけ言って俺はそこから離れあまり人が来ない所に向かった
俺はその場所の木にもたれ掛かった
そして静かに目を閉じた・・・ｚｚｚｚ

ｓｉｄｅカレン
「カレンさんお体大丈夫なんですか？」

「ええ、今日は調子がいいの」
学校についてから何回目か分からない問答・・・
いい加減あきあきなのよね。

もうみんな私に関わらないで欲しいわ。とりあえず授業が始まるまでは人がいないところにでも行って避難しよう。うんそれが良いわ。私は周りの人に一言、言ってそこを後にした

出来うる限り人に会わないようにしてその場所までたどり着いた私は、とりあえず腰を下ろした。

「プルプル」
ケータイがなった。いったい誰よ。と思いつつ見てみるとそこには玉城と書かれていた・・・・
ってあいつ何考えてるのよ！私が今学校にいるはずって知ってるはずでしょう！
私がここにいなかったら出れなかったわよ・・・
「もしもし、玉城なんの用？」

「いや、今ちょっと有名なケーキ屋にいるんだけどよ、お前は何が食べたいのかなって」
・・・・・なんですって

「玉城そんだけの理由で電話をかけてきたの？」

「ああ、それで何食べ「ふざけるなー！」！」
そんだけの理由で私が学校に来ているときに電話をかけたですって・・・・
ふふふ、いい度胸してるじゃない

「玉城覚えておきなさいね、帰ったら・・・ふふふ」
どうしてあげましょうか
「さっきから煩いな～こんな所でなに大声出してんだよ」
！

「だ、誰！」
まさか話しを聞かれていた！
だ、大丈夫そんな変なことは言ってなかったはず！
「俺か、俺はシャル・ウィリアムだ、お前は？」
「わ、私はカレン・シュタットフェルトですわ」

ｓｉｄｅシャル
「わ、私はカレン・シュタットフェルトですわ」
うるさくて目が覚めたから、俺を起こした奴の顔でも見てやろうと思ったが・・・
「まさか原作メンバーとは・・・」
「何ですの、原作メンバーって」
や、やば声に出てた！話をそらさないと
「い、いやなんでもない。それよりそんな口調疲れないか？絶対素のほうが楽だと思うけど・・・」
「さっきの聞いてたの！」
カレンが俺に詰め寄って言ってきた
まああんだけ大きな声出せばな・・・
「あ、ああ」
俺がそういうとカレンはナイフを取り出し俺の首に当てようとた。

俺はそれが俺を脅すためだと頭では理解していたが体が勝手に反応して・・・
「きゃ、・・・どういうつもり？」
カレンは悲鳴をすこしだしその後今の状態を確認し俺に聞いてきた
今の状態と言うのはつまり、その・・・、武器を奪いカレンを倒しその上に覆い被った。
周りから見たらおそってるような状態だ
「わ、悪いからだが反応してな。」
ウソはついてませんよ
「私をこれからどうするつもりだ？」
「とりあえずお前の口調のことは誰にも言わないから、これで終わりじゃ、だめ？」
これが一番良いんだが・・・
「お前の言葉なんて信用できるか」
だったらどうしろと・・・いやまて信用だと
・・・これならいける！
「だって考えても見ろよ転校して間もない友達も殆どいない奴の言葉なんてだれが信用するんだ？
それにくらべてお前はみんなに信用されてるだろ。つまり俺がなに言っても意味が無いわけオーケー？」
「いや、だけど・・・」
お、考えてる！よしここで畳みかけるしかない！

「それに今の状況周りの人がみたらかなりあれだし・・・つまり、
さっさと俺はこの状況から抜け出たいの」

「今の、状況・・・・」
カレンは今の俺の話を聞いてすこし考えたあと理解したらしく顔を
赤くした

「というわけここであったことは全部無かったことで、オッケー？」

「わ、分かったから早く離せ！」
よっしゃ勝利！

「よし」
俺はカレンを拘束している手を離した

「後これも返しとく、じゃーな！」

俺はカレンから奪ったナイフを投げると「刃はしまってあるぜ？」
一目散に自分の教室に逃げた
カレンが何か言ってた気がするけど聞こえなかった
しかし何言ってたんだろうな

ｓｉｄｅカレン
「後これも返しとく、じゃーな！」
そう彼は言うと私にさっき彼に向けたナイフ投げてきた
私はそれを受け取ると
小さく
「ありがとう・・・・」
と粒やいた・・・ってこんなの私のキャラじゃない！

とりあえず彼のことを調べなきゃね・・・・

さ、さすがは主人公・・・ｂｙ作者（後書き）

すみませんでした！
なんかカレンの口調が・・・どうか許してくださいこんどカレンがでるまでには頑張って直しますので！

えと、みなさまここまで読んでいただいて本当にありがとうございます！

作者は皆様の感想、批評、アドバイス、評価、お気に入りを心から待っています！「特に感想、アドバイス等」

それではまた会えることを願ってグッバイ、ノシ

チェスは好きだけどこんな、状況でも楽しめるほどじゃない！（前書き）

投稿が遅れて本当に申し訳ありませんｏｒｔ

チェスは好きだけどこんな、状況でも楽しめるほどじゃない！

ｓｉｄｅシャル

「チェックメイト」

俺は七回目になるそれを言いながらどうしてこうなったのかを考え始めていた・・・

俺は授業が終わり生徒会室に向かったそして、生徒会室には一人でチェスをやっているルルーシュがいた。

「そういえばルルーシュもチェスやるんだったな」

「ルルーシュ、も、と言うことはお前もやるのかチェス？」

ルルーシュもちろんやってるにきまってるだろう？

「ああ」

「ふむ、どうせなら皆が来るまで一勝負でもするか？」

確かルルーシュはチェスが得意だったな、最近、強い奴と勝負してなかったしちょうど良いな

「ああ、いいぞ」

今思えばこれがこれが始まりだった・・・・

一勝負目
ルルーシュを結構なところまで追い詰めてるところでリヴァル登場
「お、チェスやってんのか、どれどれ・・・・」
そして驚いた表情をして

「こ、これルルーシュが劣勢じゃん」
と言ってその後

「どうしたんだよルルーシュどれだけハンデを付けたらこうなるんだよ？」
と言い。ルルーシュは少し間が開いてから一言言った

「ハンデはない・・・互い戦だ」

この勝負はもちろん俺が勝ったそしてルルーシュが
「もういちどだ、もう一度勝負しろ！」
と言うのでもう一回勝負することになった
そしてまたもやルルーシュが負けているところに、ミレイ、シャーリー、リーナ、ナナリーがやってきた
そしてチェスの状況を見てさっきのリヴァルのように

「ルルーシュ（ルル）、どれだけハンデ付けたの？」
ミレイとシャーリーシャーリーが言って
リヴァルが
「いや・・・これハンデなし。実力でルルーシュがまけてるんだぜ」
と言った。
「うそー、あの授業をサボってまで賭けチェスまでするが」
そしてシャーリーがルルーシュにダメージを与え

「すごいですシャルさん・・・」
ニーナが俺を褒めたところで決着が付いた
「これで2勝0敗だなルルーシュ」
「あ、ああ」
ルルーシュはものすごく悔しそうだった
「とりあえず、皆集まったことだしもう終わるか？」
「ああ、そうだな」
ルルーシュは悔しそうだがまた今度にでもリベンジしようと言う感じだった
だがそこでナナリーが
「すごい、シャルさんチェスがお上手なんですね♪お兄様より強いなんて。お兄様もこれに懲りたら賭けチェスなんてやめて大人しくしてくださいね？」
ルルーシュに止めを刺した
「それにしてもシャルさんすごいですねお兄様に勝つなんて、まあでも最近お兄様も調子に乗っていたみたいですし自業自得ですかね？どう思います？」
ルルーシュにさらなるダメージを与えた
と言うよりナナリーってこういう性格でしたっけ
まあ笑ってるし冗談のつもりなんだろう、冗談じゃなかったら・・・・・・

は！何を考えてたんだ俺は

それにしてもルルーシュ大丈夫かな？と思い見てみると
なんか震えてました、どうしたんだ？

などと考えているとルルーシュが
「さあ、もう一戦だ・・・」
などと言いやがるじゃないですか

「いやもう皆そろったし、そろったら終わりって約束じゃあ・・・」

「ミレイさん今日は急ぎの仕事もないですし良いですよね？」
ルルーシュ！なに言ってくれてんの！

「うーん、別に良いわよ？」
こっちを見ながらミレイさんは言った
・・・空気を読んでくださいミレイさんこのままじゃ俺どうなるんですか

「と、言うわけだそれじゃあやるぞ。」
そういってルルーシュはチェスを並べ始めた、言葉は冷静だが顔はものすごいことになっている
そんなにナナリーに言われたことが嫌だったのだろうか。まあシスコンだしな・・・（なんかもうあきらめ顔の主人公）

その後も勝つたびにルルーシュが再戦を挑みそれをミレイさんが許可するという事が続いた

そして冒頭にもどる
「チェックメイト」

「シャルさん、すごいですお兄様が形無しです」
ナナリーいい加減、君の言葉がそのお兄様にとって凶器にもなるという事を覚えてください・・・

「ルル、いい加減あきらめたら？」
シャーリー良いこと言った！

「そうね、もう時間も遅いしね」
ミレイさん・・・空気よんでくれてありがとう！

「私ももう帰らないと・・・」
ニーナそうだね、そうだよね！

「・・・分かりました、これで終わります」
よっしゃ！ルルーシュがやっとあきらめたぞ
これで終われると思ったとき俺はまだ最大の関門のことを忘れていた

「なら、お部屋で続きをしましょう、シャルさんもクラブハウスに住んでいるわけですし、ね？」
ものすごい良い笑顔でものすごいことを仰ったナナリーさん、いいかげん許してください
ルルーシュ、俺は信じてるぞ！お前はこの提案を断ると

「そうだな、それがいい。行くぞシャル」
俺はルルーシュにつれていかれた、ナナリーはなぜかいつの間にか居た咲世子さんに連れられていた

「シャルさん頑張ってくださいね♪」
ナナリー・・・もうやめてルルーシュがさらに怒ってるじゃないか・

・・・

その後俺はルルーシュ達の部屋に連れられチェスを打ったそのときのことは、もう何も言いたくない・・・

チェスは好きだけどこんな、状況でも楽しめるほどじゃない！（後書き）

ナナリーはきっと今度出るときには普通の少女に戻ってるはずです、
ええ絶対もどってるはずです
それから投稿が遅れてしまったことについて
遅れた理由としては学校に用事があったのとバイトなどがあったから
です。

本当ですよ？
普通にかく時間があったっけどネタが思いつかなかったとか、そろ
そろ原作に始めようと思ったけど原作の始まりのほうを忘れて、観
ようと思ったけど観れなかったとかそんな理由じゃないですよ？

まあそれはおいて汗
ここまで読んでくれた皆様本当にありがとうございます！

よろしければ作者に感想、批評、アドバイス、評価、お気に入りな
どをしてくれるとありがたいです！

それではＧｏｏｄ　ｎｉｇｈｔ　ａｎｄ　ｎｉｃｅ　ｄｒｅａｍ

設定（前書き）

本編の投稿が遅れていて申し訳ありませんｏｒｔ

設定

いまさらながら主人公の設定を公開です汗

主人公：シャル・ウィリアム

容姿は中の上のすこし下ぐらい「けっして中の中ではないので注意！」

一人称は俺、性格は基本めんどくさがりだが、一度やろうと思ったらやりきる

運動能力はスザクの1、5倍ほど

思考能力はルルーシュの1，5倍ほど

というか大体の能力がコードギアスの世界のキャラクターのトップレベルの1，5倍

ただし技術についてはその枠には入らず「戦闘技術、ナイトメアの操縦、ナイトメアの開発など」人類が到達することができるであろう高みまで至っている「戦闘技術ならルルーシュの運動能力でスザクに勝てるくらい」

学校ではもう能力がばれても良いのである程度本気でやっている「テストを全部百点取ったり、スポーツテストで全部１００点満点もらえるくらい」

絶対贈与のギアスを持っています、相手に死を与えたり、義務を与えたりとやりたい放題です。「義務は絶対にやらないといけない事です。逆らうことは不可能です」

設定（後書き）

ギアス追加です

この設定ですが本編が進むにつれてどんどん増やして行きたいと思います

生きているのなら、神様だって殺してみせる、むしろ殺したい！ｂｙシャル（前

昨日投稿すると言っておきながら・・・
すみませんｏｒｔ

生きているのなら、神様だって殺してみせる、むしろ殺したい！ｂｙシャル

ｓｉｄｅシャル
ジリジリジリ・・・・ぽち
俺は目覚ましの音で目が覚めた・・・
とりあえず飯でも食べるか・・・

俺は顔を洗い、すばやく服を着替えてナナリーやシスコンのいる部屋に向かった。
なんで、朝飯食べるのに向かうのだって？

それは、少し前に俺が朝飯を作るの面倒だよな、などと話していたのを咲世子さんが聞いて朝、朝飯を作ってくれる事になったのだ。

実はそのときルルーシュとひと悶着あったがそこは割愛する。
しいて言うならナナリーの一言、これで全てだ

とりあえず部屋に着いたわけだが朝飯の風景はまあ書かないでおこう。
「べ、別にバイトで疲て眠いわけじゃないんだからね！ただここを書くと文字数の関係で一話で終わらないだけなんだから！それだけだからね！ｂｙ作者」

しいて言うなら俺にシスコンらしいこと言ってきたルルーシュが黒化したナナリーに・・・まあ良いだろうもう

とりあえず朝飯を食べた俺は外にでることにした。

まあ別に何するわけでも無しにブラブラするのもたまには良いだろ

う思いつつ俺は外に出た。

とりあえず近くのCDショップに入ることにした、そしたらbum p of chickenのCDが出てたので買うことにした。それを買った俺はCDショップを出ることにした。

その後に俺は久々にゲームセンターに行くことにした

とりあえず新しいゲームが出ていたのでプレイし、ランキング一位をとって頂点のところにS・Wの名前を刻んで置いた。

実は暇を見てはゲームセンターでランキング一位をとってS・Wの名前を刻んでいるのだ。

その後ユーフォーキャチャーを調子にのってプレイしすぎて景品を取りすぎたので生徒会のメンバーにあげようと思う

そして昼になったので昼飯を食べることにした

俺はラーメンを食べることにして屋台に向かった

ラーメンはショーユだ

昼飯を食べ終えた俺は次に何をしようか考えて歩いていたら、まあ何というか定番の用に女の子がチンピラ達に絡まれていた。

見捨てると言う選択肢も無いわけでは無いがさすがにそれはな・・・

などと考えてそこに向かいチンピラ達どもに言った

「そこの時代遅れのチンピラ達、さっさと消えろ」

「あ〜、何言ってんだお前！」

「やっちまうぞ、あ！」
絶対お前達には倒せねーよ
まあそれならそれでこっちは・・・
「実力行使させてもらうぜ！」
俺はそう言って近くに居た一人の腕を取ってそのまま投げた
「て、てめー何をする！」
とりあえず何をするもないと思うが・・・
「だから実力行使だって。そういうわけだからじゃーね」
そして俺は全員を一通り投げておいた「コンクリートだと投げ技きくんだよねーｂｙ作者」
「で、そこのお前は大丈夫か？」
俺は女の子に聞いた
「は、はい大丈夫です、ありがとうございます・・・あ、危ない！」
そう彼女は叫んだ
俺は反応が遅れて・・・
なんてことにもならず、てか気づいてたし。
後ろからナイフでさそうとしてきた奴の手を蹴り、ナイフを落とさせ。
顔面をいっぱつ殴っておいた
「それじゃあ、気をつけて帰れよ」

俺はそのまま逃げてない不良をにらみ、不良は一目散に逃げていった
そして帰ろうとすると声をかけられ
「あ、あのお礼をしたいんですけど、ご飯でもいかがですか」
・・・ふむ食べても良いんだが
「俺もう昼飯食べたから。そういうわけだから気にしなくて良いよ」
そして俺はそこから去った
ｓｉｄｅ　？
「なあ、彼女付き合おうよ～」
「い、いやです・・・」
ど、どうしてこうなっちゃったの。
誰か助けて！
「そこの時代遅れのチンピラ達、さっさと消えろ」
そして声が聞こえた
「あ～なに言ってんだお前」
「やっちまうぞ」
助けが来たと思ったけどこれじゃあ彼が危ない！
どうしようなどと考えていると
「実力行使させてもらうぜ！」
そう彼は言って近くの不良を投げ飛ばした
そのまま彼は不良を全員投げて私に聞いてきた
「で、そこのお前は大丈夫か？」

「は、はい大丈夫です、ありがとうございます・・・あ、危ない！」
御礼を言って彼のほうを見ると後ろからナイフを持ったさっきのチンピラが彼のことを刺そうとしていた
刺される！と思ったら彼はそのまま振り向いて、振り向いた勢いでナイフを持った手を蹴り、そのまま顔を殴った

「それじゃあ、気をつけて帰れよ」
そういって彼は帰ろうとした
私はそれがなんだか嫌で勇気をだして彼をご飯に誘った
「あ、あのお礼をしたいんですけど、ご飯でもいかがですか」

「俺もう昼飯食べたから。そういうわけだから気にしなくて良いよ」
そういって彼は帰っていった
・・・そんなことって無いよ～

ｓｉｄｅシャル

さきほど女の子を助けた俺はクラブハウスに帰って寝ることにした。
それにしてもこれも主人公の能力なのか、さっきみたいなことがこっちに着てから既に数回あるのだが・・・
やっぱり神（笑）殺さないといけない気がしてきた・・・
そして部屋に着いた俺はそのまま眠った・・・

投稿が遅れてしまい申し訳ございませんｏｒｔ
だけど許してください！じ、実は昨日半分以上書いていたのが消えてしまったんです！

それじゃあ書く気がおきませんよ汗

それにしても主人公なんかこんな予定じゃなかったのに、モテモテになりそうですね・・・

そういえばあとすこしで夏休み終わるのに宿題やってないな・・・

まあともかく作者は感想、批評、お気に入り、評価、リクエスト、アドバイスなどなどいつでも受け付けていますのでどしどし送ってください！

それではノシ

原作のはじまり（前書き）

やっとテスト終わった！
学校が始まったので投稿のペースは落ちると思います

原作のはじまり

ｓｉｄｅシャル
「なんだ学生か」

「ふ、なんだ貴族か」
今日俺はルルーシュとリヴァルの賭けチェスについて来てます

「若者は良いな時間がたっぷりある、後悔する時間がな。名は？」

「ルルーシュ・ランペルージ」

「そちらは？」
聞かれたので答える事にした

「シャル・ウィリアム」

「おい、おいいくらなんでもこれは勝てないって」
リヴァルがチェス盤を見ていった
そしてルルーシュは
「リヴァル次の授業に間に合うには何分後にここを出ればいい？」

「え、ああ飛ばせば二十分ほどで」

「それなら帰りは安全運転でたのむ」
さすがの余裕です・・・
まあ勝つだろうけど

「それでどちらが私と勝負するのだ？」

貴族の男が言ってきた

「こっちのルルーシュがやる。だよな？
俺はルルーシュに確認した

「ああ、これなら九分ですむ」

「九分？一手二十秒だぞ」

「分かってますよ」
ルルーシュ・・・たぶんそんなに掛からないぞ

「ふふ、そうか」
貴族のほうは笑ってるしどうせ自分が勝つまで九分とか思ってるんだろうな・・・

ｓｉｄｅ　会話文のみ
「ルルーシュは？」　ミレイ

「リヴァルがつれて言っちゃった」　シャーリー

「ならシャルは？」　ミレイ

「そっちもリヴァルがつれていった・・・・」　ニーナ

「三人とも生徒会の自覚がないんだから！お金を賭けているんですよ！」　シャーリー

「ふふふ、ルルーシュが近くに居ないからって怒っちゃだめよ」
ミレイ

「うううう」　シャーリー

ｓｉｄｅ　シャル
「もう、サイコー。貴族ってプライドあるから支払いも確実だし。
そのうえ七分四九秒の新記録」

「相手の持ち時間が少なかったからな。それに温いんだよ貴族ってやつは」
やっぱりルルーシュは貴族が嫌いだな

「それでもすごいって！」
リヴァルがそういったところでニュースが流れてきた

「ブリタニア帝国第三皇帝クロヴィス殿下からの回線です」
「帝国市民のみなさんそして大多数のイレブンの皆さん、分かりますか私の心は今二つに分かれています怒りの心と悲しみの心です。
しかしこのエリア１１を預かってる私がテロに屈するわけにはいけません！なぜならこれが・・・・・・」

「リヴァル行こうか」
ルルーシュ、ナイス！正直聞いていて長すぎる
「それに俺達が哀悼を捧げたって死んだ人がよみがえる分けでもないしな」

「うわ、ひっで」
別に酷くは無いと思うぞリヴァル・・・

「そうだな早く帰らないと怒られるからな」
そういって俺はバイクのキーをバイクにさした

いっておくが俺のバイクだからな。借り物とかではなく

「そう所詮自己満足、世界は変わらない・・・」
ルルーシュが少し小声で言った
それにしてもこの展開なんか覚えがあるような・・・

俺達はバイクにのって高速に乗った・・・

「最初の手さ？なんでキングから動かすの？」
リヴァルがルルーシュに質問した
ルルーシュは
「王様から動かないと部下が付いてこないだろ」
といった。別にチェスだから良いと思うんだけどね・・・

「あのさ」

「うん？」

キキーーーーーーー！
後ろからトラック急に来た！
俺は大丈夫だったがリヴァルが運転を誤り
後ろから来たトラックは事故を起こした。

なんか本当にこの展開覚えがある。てかコードギアスの第一話じゃねーか！

はーなんで関わっちゃったんだろ・・・
てか俺がいろいろ考えている間にルルーシュがトラックの方に行っちゃたよ・・・

まあいいさ。もうどうにでもなれ・・・

「なあ、シャル。ルルーシュのあの性格どうにかならないかな？」
リヴァル・・・それは

「無理だな。ルルーシュが変わるとも思えない」

「そうだよな、う？てかあのトラック動いてない？なんかルルーシュ中に入っちゃったけど・・・」
ああ物語の始まりだな・・・

「まあ大丈夫だろう。一足先に俺は帰るよ」

「ああ、分かった」
これから大変だろうけど頑張れよリヴァル

俺はバイクを走らせ学校に向かった

これでルルーシュはギアスを手に入れる

つまりこのエリア１１つまり日本が戦いの場になる。

俺はどうするべきなのだろうね？

主人公の能力なのか原作から離れることが出来ないし。

そしてたくさんの人が死ぬことになる。

行政特区日本でのあの事件はさすがに防がないとまずいよな・・・

俺は自分がどうするべきなのか考えながら帰っていった・・・・

今の自分の居場所に

原作のはじまり（後書き）

これからは週2、3ぐらいで頑張りたいと思います！

というかようやく原作が始まった・・・

本当に長かった汗

本当なら四、五話あたりで入るはずだったのに・・・

まあ、それはおいて皆さん出して欲しいオリキャラとかいますか？もしいるのなら名前と性格、話かたなどを書いて作者に送ってください！

何というかオリキャラの方がまだ書きやすい気がします汗

それとライについて何ですが出すかどうか皆さんに聞きたいです。どっちが良いかこちらも送ってくれれば幸いです「ついでに言うと作者は出したいです」

そしてなんと！ＰＶ十万＆ユニーク一万三千突破です！

こんな作者の駄文をこんな大勢の人に見てもらえるなんて本当に感激です！

これからもよろしくお願いします！

作者は感想、批評、アドバイス、お気に入り、評価を待っています！それらが入るたび作者のやる気が上昇します！

生徒会主催！歓迎会！・・・・飯食べさせろー（前書き）

学校だるい・・・ｏｒｔ

生徒会主催！歓迎会！・・・飯食べさせろー

ｓｉｄｅ　シャル

「シャルー今から新しく生徒会に入る子の歓迎会の準備をするか手伝いなさい！」

ミレイさんがクラブハウスに入ってそういった

原作であったカレンの歓迎会だろう

「ミレイちゃん、新しく入る子って・・・誰？」

「またまた、おじいちゃんに頼まれちゃってね。カレンちゃんなんだけどね、体のこともあるから部活は難しいだろうって」

「分かりました、それで何をすれば良いんだ？」

「そうねーとりあえず、机を並べて頂戴」

「ミレイさーん私達は何をすれば良いんですか？」

シャーリーが自ら率先して何の仕事をすれば良いのか聞いた。

ほんと健気ですね～俺なら絶対自分からやりたいとは思いませんよ、もうほんとに

「そうねシャーリーとニーナは料理でも手伝って貰おうかしら、今咲世子さんナナリーが作ってるはずだからそれを手伝ってきて」

「はーい分かりました」

「り、了解ミレイちゃん」

よし！おいしい飯食べれるな！

「俺は？」
さっきまで空気だったリヴァルが寂しくなってきたのか、自分が何をするのか聞いた

「シャルの手伝いよ～ん」

「シャルの手伝いか～、よろしくな」
リヴァルは俺の手伝いらしい、まあこき使ってやろう

「な、なんだか今俺にとって良くないことが起きる気がしたような・・・」
リヴァルが何か言ってるが気にせずこき使ってやろう・・・

「時間がないから皆頑張ってね♪」
・・・なんだか嫌な感じがする

「あのミレイさん時間が無いってあとどれぐらい・・・」
シャーリー聞くんじゃない！それを聞いたら戻れなくなる！

「そうねー、後一時間位かしら？」

ピキ、一瞬俺達の周りの時間が止まった
そしてそれを気にせずミレイさんが・・・

「それじゃあ、ファイトー、オー！」

それからが大変だった・・・

ｓｉｄｅルルーシュ
「学校内にこんな場所があっただなんて知らなかったわ」
「生徒会専用のクラブハウスだ、舞踏会なんかも出来るように作られている」
さてどうするべきか・・・
ギアスは同じ人には二度は聞かないことは既に分かっている、それに俺にはコマが必要だしな
「ここなら邪魔は入らない」
さすがだな、よく分かっている・・・
「そういうことだ」
ここで「あったー」！
俺とカレンは声がしたほうにいっせいに振り向いた

ｓｉｄｅシャル
「あったあった、これでしょう」
シャーリーが探していた物を見つけたみたいだ、良かったこれで間に合う
「ああ、これです。良かった～」
「ほんとだよ・・・」
「ふーどっこいせ」

・・・リヴァルお前は親父か

「しゃんと見つかった～、こっちも出来たから始めますか」
ミレイさんが料理を運んできた

「うおーすげー」

「おいしそーう」
まあ上の言葉から分かるように・・・ものすごく旨そうだ！

「ふ、ふふーん。もっとほめるが良い」
ほめるから早く食べようぜ・・・

「あの、これはなんですか？」
ルルーシュ居たのか、じゃあ隣にいるのはカレンか・・・

「あれ？分かってて連れて来てくれたんじゃないの？」
「カレンちゃん生徒会に入れるから」
さらっと言ったな・・・

「はぁ！」
まあそうなるわな

「お爺ちゃんに頼まれちゃってさぁ、まあ体のこともあるし普通の部活もねぇー。あ！私、生徒会長のミレイ、よろしくね」

「あ、はい」
ミレイさんがカレンに自分のことをすこし説明した、カレンはすこし戸惑っていっるようだ。まあいきなりだしな。
とか思ってるうちに皆我先にとカレンのところに向かってるし。早

いなおい

さらにすこし遠くにナナリーがお菓子を持ってこっちに向かって居た
俺はナナリーを手伝うことにした

ｓｉｄｅカレン
「お爺ちゃんに頼まれちゃってさぁ、まあ体のこともあるし普通の部活もねぇー。あ！私、生徒会長のミレイ、よろしくね」

「あ、はい」
なんだか急に言われて返事をしたけど、私が生徒会に入るってどういうこと？

「俺、リヴァルわからないことがあったらなんでも聞いて」

「私シャーリー、水泳部と掛け持ちだけどよろしく」

「わ、私、ニーナ」
なんだかいつの間にか皆話しかけてるし。
えと、これは私も自己紹介したほうがいいのよね？

「えと、私は・・・」

「シャーリーさん手伝ってもらえますか？」
ふいに別のほうから声が聞こえたそちらを見ると、車椅子に乗った子とあの時あったあいつがいた。

ｓｉｄｅシャル

「シャルさん、こっちお願いしてもらっても良いですか？」
ナナリーがお盆をひとつ頼んできたけれどひとつ残ってるので
「そっちはどうするの？良かったら俺がやるけど」
と聞いたおいいしいご飯を食べるためだそれぐらいする
「ああ、こっちは・・・」
そして少し区切って
「あの、シャーリーさんこっちテーブルに置いてもらって良いですか？」
シャーリーに助けを呼んだ、いや別に俺でも良くないか？
そして皆こっちを見た
「あ、」
カレンはこっちを見て言葉を漏らした、やっぱり俺のことは覚えているらしい
「ありがとうナナちゃん」
シャーリーはそれを聞いてナナリーのほうに駆け寄った
「ナナリーお前まで、」
シスコンのルルーシュ君はやっぱりナナリーが気になるようです
そしてミレイさんがカレンに向かって
「ルルーシュの妹よ、隣にいるのは生徒会のシャルね」
と俺達の説明をした
「あいにく、中等部なんで生徒会じゃないんですけど」

ナナリーはすこし悲しそうに言った

「準会員ってことでいいでしょ」
リヴァル、ナイスだ

「カレンさんよろしくお願いします」
ナナリーはやっぱり普通だ原作と同じだ、今までのことがウソに思える・・・

「え、ああよろしく」
カレンはすこしあわてて答えた・・・

「まあ、とりあえず。これで乾杯といきましょう！」
リヴァルはそういってワインを取り出した。

「ちょ、生徒会でそれはまずいでしょう！」
シャーリーがリヴァルからワインを取り上げようとした。それでもリヴァルは抵抗してルルーシュにむかって

「へい、パース」
ワインを投げた、そしてそれを追ってシャーリーがルルーシュにぶつかって行った。
そして体が貧弱なルルーシュが耐えれるはずも無く倒れた、そしてその衝撃でワインのふたが取れ・・・

プシューーー・・・
カレンに掛かった、なんともまあ。
そしてそれでカレンの歓迎会はお開きとなってしまった

なんでだーーーーーーーーーーー！

生徒会主催！歓迎会！・・・・飯食べさせろー（後書き）

まず先に、月光閃火さん、感想ありがとー！

私こと作者は感想をぜひとも待っています！というか送ってくださーい！なんか寂しいです・・・・

いちおうアニメのほうを見ながら書いているのでキャラのせりふはアニメで出てたところはそのままです、こう見ると俺が書いてる口調と原作とではものすごい違いがありますね・・・・・・

まあおいといて作者は感想、批評、お気に入り、評価をまっています。・・・戯言です

原作とのずれ始め（前書き）

・・・・一回文章が消えた、よくもう一回書く気になれたと自分でも思う

原作とのずれ始め

ｓｉｄｅ　シャル

「シャル、すまない俺の代わりにカレンを迎えに行ってくれないか？」

ルルーシュが俺に頼んできた、と言うより何故俺なんだろうか？原作どうりにルルーシュがカレンの相手をしていたはずなんだが？

「それはルルーシュの役目だろ？」

「それがさっき、カレンに頼まれてな。頼む」

カレンに頼まれた？どういうことだ？

だが断る理由も無いし、良いか

「まあ、いいぞ」

「助かる、それじゃあ頼んだぞ」

俺はカレンを迎えに部屋に向かった

――――で、俺は今部屋の前まで来ている

コンコン

「カレンいるか？」

「ええ、入って来て大丈夫よ」

普通そっちが出てくるんじゃないか？と思ったがとりあえずドアを開ける事にする。

「入るぞ」

俺は部屋に入った。

そこにはなんと×××の姿のカレンが！

・・・・・まあ普通に服着ていますけどね

「それにしても、なんで俺を呼んだんだ？」

「貴方に聞きたい事があったの」

俺に聞きたいこと？

「あの後、私は貴方の事を調べさせて貰ったわ、咄嗟で私を無力化できる男。これは只者じゃ無いってね」

調べられていたのか、まあでも変な情報とかは無いから良いか

「だけど、分かったのそんなことは出来ないって言うような情報ばかり。ねえ貴方は何者なのかしら？良かったら教えてくれないかしら？」

「それは単に俺が実力を隠してただけさ、軍人になるのは嫌だからな」

「ふふふ、まあそれで許して上げる。それよりも、あの時の事だれにも話していないわよね？もし話してたら、分かってるわね」

「もちろん、言ってないさ。」

むしろ忘れかけてたしな、まあ言っても俺に得なんてないしな

「それなら良いけど」

「それで、話ってそれだけか？それなら行くぞ」

「ええ、良いわ」

俺達二人は生徒会室に向かった

ーーーーーそのころ生徒会室

「あれ？ルル、カレンを迎えに行ったんじゃ無かったけ？」

シャーリーは部屋にいるルルーシュにそう言った

「それなら、シャルに頼んだ。カレンがシャルに話があるようだったからな」

「ふふーん、話ね～」

ミレイが思わせぶりに言った

「ミレイちゃん、どうかしたの？」

「カレンも乙女なのね～と思っただけよ。ふふふ」

ミレイは良い笑顔でそう言った。そのときの笑顔はまさにからかいがいが在る、とでも言っているようだった。

「えー、でも会ったばかりで有りますか、そんなの？」

シャーリーはミレイに疑問を投げつけた

「ふふ、実は既にあの二人会った事があるみたいなの」

「ええー、羨ましいなシャル」
リヴァルは悔しそうにそう言った

「それにしても二人遅いですね？」
ナナリーがそういった

「まあ、そのうち帰ってくるでしょう、そういえばルルーシュここの書類なんだけど「ニュースです」ん？」

「軍がクロヴィス殿下がお亡くなりになられた事を正式に発表しました」
そのニュースに生徒会のメンバーが全員黙った、それぞれ黙った理由は違うけれども

「そして今から軍が後見を開くようです、それでは中継を・・・え、はい分かりました」
キャスターの人が誰かと会話をした

「たった今新しい情報が入りました、実行犯と思しき人が捕まったようです。捕まったのは名誉ブリタニア人の枢木スザク一等兵。もう一度繰り返します、捕まったのは名誉ブリタニア人枢木スザク一等兵です」

「え、」
ナナリーはルルーシュの顔を見た

そしてルルーシュの顔は驚愕していた

――――――――時が止まることは無く、時はいつでも流れ行く

原作とのずれ始め（後書き）

すこしばかり「すこし？」投稿が遅れてしまいました、申し訳ございません

実は私は原作には主人公は第三勢力を作って介入させようと思ってます。
主人公の性格的に誰かの下で働く命令を受けるなんて、嫌そうですしね。

しかし、黒の騎士団やブリタニア側などで介入したほうが良いでしょうか？
出来る限り楽しく読んでもらいたいですし、第三勢力が嫌だなどと言われればやめようと思います。

まあ話は代わって
作者は感想、批評、お気に入り、評価を待っています。よろしくね♪

守りたい世界　ｂｙロストカラーズからライ「でないよ！」（前書き）

またもや消えてしまった・・・なんだよ！接続が切れましたって！

消える前に書いてた量の約三分の二ぐらいになってしまった「汗

申し訳ございません

守りたい世界　ｂｙロストカラーズからライ「でないよ！」

ｓｉｄｅシャル
「まことに、痛ましき事件でした」

「このエリア１１の総督でもあり、敬愛すべきクロヴィス殿下は既にこの世におられません、しかし私達はこの悲しみに耐えねばならないのです、それを力とせねばならないのです！なぜなら・・・」

さっきからずっとこんな感じです、こんな式サボりたかった・・・だってクロヴィス活躍してないしさ、原作では何をしているとかあまり書かれてなかったから期待してたけど全然ダメだったし。それにクロヴィスが死んでもコーネリアが来るしな
そんな事考えてると本当にサボりたくなってくる

まあ、もう直ぐ終わりそうだからもう良いけどさ・・・

――――――――式が終わりました
俺は帰る生徒の中にルルーシュとシャーリー、リヴァルが居たのでそちらに向かった
そしたらシャーリーがルルーシュに純血派について聞いていた。

ルルーシュは純血派とは軍にはブリタニア人だけで良いという考えのグループと言った、だが俺は違うといいたい、純血派はオレンジだけで良いのだ！勿論ヴィレッタはいても良い、だが他の奴等はいらん！なぜなら「主人公が暴走し始めたので切ります。正直、主人公原作大好きだろ・・・ｂｙ作者

「ルルーシュ、シャルこの後どうする？折角授業が無くなったんだし前から頼まれてたこれ」
そういってリヴァルはチェスの駒を動かすふりをした、てかリヴァル賭けチェス好きだよな

「ダメよ、賭け事は」
さすがはルルーシュ大好き娘のシャーリールルーシュだけに言いました！（笑）

「硬いこと言うなって」

「そうだな、もう辞めるよ」

「え！どういうことだよ？」

「もっと手強いのを見つけた」
そういえばルルーシュはもうやらなくなるんだったな、なら俺も

「それなら俺も辞めようかな、どうせルルーシュに付き合ってただけだし」

「ええ！ちょっとまてって。とりあえすルルーシュ俺にも紹介してくれよ、後シャルはルルーシュを説得してくれ～」

「やめたほうが良いよ、そういうの嫌いな人だし」
ルルーシュはやんわりと断った、まあ

「そういうわけで、無理みたいだぞ。まあ諦めろリヴァルｗｗ」

「説得してないだろシャル！てか二人とも抜けるなんてやめてくれ

ー！」

「ねえ、本当にもう賭けチェスやら無いの！」
シャーリーがものすごく嬉しそうに言った、それにくらべリヴァルは・・・（笑）

「ちょ、マジでもう辞めるの！どっちか残ってくれ～」

俺はリヴァルやシャーリー、ルルーシュ達と他愛も無い会話をして時間をつぶした

そしてその後外に出かけることにした、こんな他愛も無い会話を無くさないためにもシャーリーの父親を助けるために、原作を変えるために。色のある世界を守るために

守りたい世界　ｂｙロストカラーズからライ「でないよ！」（後書き）

投稿が遅れたことを深くお詫びいたします！

言い訳をさせていただくなら前書きにも書きましたが接続が切れたのが元凶です！

その後書く気が起きなくてこうなってしまいました（汗

次の話は出来る限り早く書きたいと思います！

そして死の恐怖さん、桜井舞人さん、神場　司さん、パジェロさん、レギさん、もちさん、清浦刹那さん、グラームさん、いも犬さん、たけ犬さん、感想ありがとうございました！

それではここら辺で、ただの見るだけに興味ありません。この中に感想、批評、お気に入り、評価をする人がいたら、あたしのところにいれなさい。以上

・・・元ネタは分かるよね？勿論見るだけでもＯＫですよ？（笑）

守ってやるよ、大切な人って奴を・・・さ　byシャル（前書き）

前回から大幅に投稿が遅れて申し訳ありません

もはや何も言うまい・・・

守ってやるよ、大切な人って奴を・・・さ　ｂｙシャル

ｓｉｄｅシャル

俺は今ある研究所の近くにいる。
そこはまさにアリの子一匹通さないといったような厳重な警備だった。
まあ俺は簡単に侵入できるんだけどな、チートボディーさまさまだ。
俺は入り口にいる兵士の意識を音も無く刈り取った。
そして研究所に侵入した。

研究所の中は明るく、あまり人の気配がしなかった。

侵入してからも特に誰にも見つかることも無く、俺はある人物を探し続けた。

そして関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を見つけ中に侵入することにした。
そこでは
――――――――――人体実験がされていた
人が人とは扱われず、まるで物のように扱われていた。
そこにはバトレーや他の研究者達もいた。
図らずも探していた人物を見つけたのだ。

俺が向こうを見ると向こうも気づいた様子で
「部外者が勝手に入るんじゃない」
「誰かこいつを拘束しろ、実験材料にしよう」
「研究の邪魔なのよ、早く殺しなさい」

などと言った。

彼らはこの光景には何も思わないのだろうか、と言うよりも自らが作ったこの光景に何か罪悪感は湧かないのだろうか？

俺は別に人体実験をしたことについては何も言わない。それは仕方が無いことなのだと理解しようと思えば理解できるからだ。

ただ、もしこいつらが人の命について何も思わないクズならば。

俺はこいつらを許せない。

だから！

「お前達はこの人たちに何か罪悪感を抱いているか？」

「そんなの抱くわけないだろ、ただの研究材料だぞ。」

「そうよ、頭可笑しいんじゃない？」

「そうそう、それにお前は今からその研究材料になるんだから、そんなこと気にしている場合じゃないぞ、まあもう遅いが」

「ああ・・・分かった」

「おお、なんだか知らないがけ「お前達が本当のクズだと言う事がな」！」

これなら躊躇わない。

俺はこいつ等にギアスを使うことにした・・・

「シャル・ウィリアムが名において贈る、お前達に感情を無くし、ただの俺のしもべとなる義務を与える！」

絶対贈与のギアス、それが俺の神から貰ったギアスだ。

今みたいに言って相手の意思を奪うことも出来るし。直接、死を与えることも出来る。
ただ一方的にそれが何であれ与えるという、自分勝手なギアスだ。
神から貰った恩恵なのか、これはコードを持つ奴にも使えるらしい。
ずいぶんと凄いのを貰ったが俺はあまりこれを使いたくは無かった、人の意思を無視するギアスなど。
だけどこいつ等のおかげで罪悪感もなにも無く使えた。
「直ちに人体実験をやめろ、そして助けれる人を全て助けろ！」
これがこいつ等への最初の命令だった。
なんてことも無い、唯の偽善だ。
俺はＣＣが実験されていたことも知っていたし、オレンジがされていた事も知っている。
ならこのことは少し考えれば分かることなのだ。
だけど俺はそんな事あるわけ無いと心の中で否定し続けた。
もし本当にそう思うなら、別にここに来なくても良かった。
軍に潜入してナイトメアを手に入れることや、人員を手に入れることだって出来るのだ。俺ならば。
だからこれは偽善だ。仲間を守るついでに自分が嫌だからと、助けるだけの。
自分勝手の考えだ・・・・・・

俺はあの後ナイトメアフレームを開発するための材料を用意するように言ってから。研究所をでた。

その後意味も無く歩いた、ひたすら歩いた。

そしていつの間にかゲットーまでたどり着いていた。ここは嫌いだ。

否応が無しにもここは現実だと分かってしまう。景色は確かにアニメで見たのと似ている。

だけど、この血の匂いや腐った匂い、死体などが転がっているのを見ると、絶対に似て非なるものだと言うことが分かる。

だから、俺は・・・皆を守ろうと思ってしまう。

原作には関わりあいたく無かったのに、皆と触れ合っている内に唯の友達と思うようになってしまった。

いつの間にか亡くしたくない者になっていた。

そして原作を知っている俺だから、神に力を貰ってしまった俺だから。

救ってみせよう。

全て守って、救ってまたここに来るとしよう。

きっと何もかわらず血の匂いがして死体が転がっているような場所だろうけど、なにか一つでもかえられるかもしれないから・・・

守ってやるよ、大切な人って奴を・・・さ　ｂｙシャル（後書き）

更新遅れて申し訳ございませんでした！まさかこんな駄作家がスランプなどにおちいるとは・・・頑張って進めるので見放さないでください！

とりあえずこれにてシリアスパート終了です。もうシリアスパートなしで最終話までいけると良いな・・・・・・

それにしてもテスト前日になにやってるんでしょうね（汗

まあ赤さえとらなければ良し！ということで。

そういえばこの前チラっと見たんですが・・・

まさかの総合評価１０００超え！ＰＶ２５万達成ユニーク役３万５千達成！

本当に感謝の嵐です！ありがとう！

なにか記念に書いたほうが良いですかね？

最後に作者は皆様方からの感想、批評、評価、お気に入り、を待っています。

どしどし送ってください！それがやる気につながります！

・・・・・・・送るよね？お願い、送ってよ？送ってくれないと私・・・・貴方と一緒に心中しちゃうからね？ｂｙヤンデレ（？）でした

やっちまったｏｒｔ　ｂｙ後になって気づいた主人公（前書き）

ははは、やっちまったｏｒｔ

詳細は後書きにて

やっちまったｏｒｔ　ｂｙ後になって気づいた主人公

ｓｉｄｅシャル

俺は今学園に帰ってきたところだ。

とりあえず部屋に帰ってこれからどうするか考えようと思う。

なんて事を考えていました。

今俺の目の前に何故だかＣ．Ｃ．が居ます。

なんか、もう夜遅くなのに誰か居るから声をかけたらそれがＣ．Ｃ．だったんだよ！

どうしてこうなった！

「ああ、ちょうど良い。お前ルルーシュの部屋がどこにあるかおしえてくれ」

しかもなんか質問されるしー！

てかお前ルルーシュの部屋知らないのかよ！なんでここに居るの分かるのに、部屋はわかんないのかよ！

てか原作ではいつの間にか侵入してただろうが！それに「主人公が変な思考のループに入りましたのでしょうしょうお待ちくださいｂｙ作者」

はぁはぁ、まあ良いか部屋を教えるぐらい。「ここまでの使用時間わずか０、３秒、さすが主人公チートだ」

「よく聴け、そこの建物に入って、二階に上り、そのあと『いや、もう良い、もっと良いことを思いついた』」

なんだ、もっと良いことって？

「お前が案内しろ」
ふむ、まあ良いか別に誰かに見つかったりしなければ良いだけだし。
「分かった」
「ほう童貞君のくせに良い判断だ」
「・・・童貞君とは、いきなりどういうつもりだ」
これでも結構もてるほうなんだぞ！
神（笑）のせいでフラグがたくさんたつしな！
「おい」
それに前世でも・・・あれ？俺そういえば彼女も居ないし、告白したこともされたこともないよな～
「おい、きいているのか？」
で、でも今は・・・別に誰かと付き合ったり告白されたりとかなかったな・・・・・・

バシ！
いきなり両頬をたたかれた、その手をそのまま両頬において、顔をむりやり向かい合わせにされた。
勿論C．C．に。
「勝手に妄想の世界に入るんじゃない！案内することに承知したのはお前だろうが」
は！忘れていた、そういえばそうだったな。
「すまん、じゃあ行くか」

「はーこれだから童貞は・・・」

「・・・」

何も言いませんよ、ええ何もね！

「ふむ、なんだその顔は？」

「なんでもない」

「なんだ、私としたいのか？別に良いぞ、ただしもっとかっこ良くなったらな」

「興味ない」

ふん、お前なんかとやるもんか、絶対にな！

「まあ良い、さっさと行くぞ童貞君」

そう言ってC．C．は俺の服を掴み歩いていく・・・て！

「お前は場所をしらねえんだから、どうやって行くつもりなんだよ！」

そう言うとC．C．は歩くのをやめ

「そういうことはもっと早く言え、童貞君」

・・・俺切れて良いよな

「お前が勝手に行こうとしたんだろうが！」

「良いからさっさと案内しろ」

う、うがあああああ・・・

――――――――ルルーシュの部屋の前

「・・・ここがルルーシュの部屋だ」

・・・もう、疲れたよパトラッシュ

「そうか、それじゃあな童貞君」

ここまで来て御礼の一つもないのか、まあ良い、もう疲れた。

「ああ、それと中にはルルーシュの妹と、咲世子さんがいるから気をつけろよ」

「ふん、私がそんな事を気にするとでも」

ええ、思いませんよ、思いませんとも！

「はいはい、もう俺は帰るからな。じゃーなC．C．」

「ああ」

・・・なにか、やってしまった気がするけどまあ良い帰るか

ｓｉｄｅＣ．Ｃ．

「はいはい、もう俺は帰るからな。じゃーなＣ．Ｃ．」

「ああ」

そういってあいつは帰っていった。

まあなんとも面白い奴だった、あいつとは良い関係を保てそうだ。

クッククク

さて、案内して貰ったことだし、契約者どのに会いに行くとするか。

・・・・・そういえばあいつに私の名前を教えていたか？

やっちまったｏｒｔ　ｂｙ後になって気づいた主人公（後書き）

すいません、またしてもやってしまいましたｏｒｔ

一月って一月以上って・・・

一応理由はあるんです！

一言で言うと親が鬼だったってことです！

・・・詳しく話せ？はい分かりました。

実はテストで悪い点数をとってしまい一月パソコン禁止にされていました。

ひどい親ですよね、たかだか四教科赤点を取っただけなのに。

これからはパソコンが復帰したので出来うる限り書いていきたいと思います！

そしてみなさん！これから頑張っていきますので見捨てないでくださいｏｒｔ

それと前話はすこし書き換えさせていただくかもしれません。

自分でもこれはなあと思う会話文がありましたので。

では最後に、

作者は感想、評価、お気に入り、アドバイスを送ってくれても嬉しくないんだからね！

べ、別に感想を見て嬉しがったり、評価やお気に入りが増えてガッ

ツポーズとったりしてないんだから！

・・・・・・バカ送りなさいよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2434n/

やっぱり神は神(笑)で十分だと思う

2010年11月23日21時58分発行